

18 世紀近世朝鮮語の過去と関わる形式について ——『種徳新編諺解』の分析——

高橋 春人

18 세기 근대 조선어의 과거와 관련되는 형식에 대하여
- 『종덕신편언해』의 분석 -

타카하시 하루토

Abstract

근대 한국어의 과거를 나타내는 형식으로 선행 연구에서는 ‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-앗-’과 같은 형식들이 기술되어 있다. 이 글에서는 그러한 형식들이 실제로 어떻게 구별되어서 쓰이고 있었는지 『種徳新編諺解』의 용례 분석을 통해 살펴본다. 그 결과는 다음과 같다. 종결형의 경우 회화문에서 일반적으로 쓰이는 것은 ‘-앗-’이다. ‘-Ø-’는 반문을 나타내는 의문문에 쓰였으며 ‘-더-’는 화자의 목적과 관련이 있는 듯하다. 피인용문의 경우는 ‘-앗-’과 ‘-Ø-’가 모두 쓰이는데 전자는 한계동사와 자주 사용되며 후자는 비한계동사와 자주 사용된다. 지문에서는 ‘-앗-’이 출현하지 않으며 ‘-Ø-’가 전경을, ‘-더-’가 배경을 나타내는 경향이 있다. 그러나 ‘-더-’가 ‘등장인물과 가까운 시점을 나타내거나 이야기의 장면에 근접해서 서술하는’ 경우도 있다. ‘-니’ 연결형의 경우 회화문에서는 ‘-Ø-’가 비한계동사와 자주 쓰이며 ‘-앗-’이 한계동사와 자주 쓰인다. 한편 ‘-더-’는 선행절의 내용과 후행절의 내용이 서로 상반되는 경우에 쓰이는 듯하다. 지문에서는 ‘-Ø-’가 전경을, ‘-더-’가 배경을 나타낸다. 그리고 ‘-앗더-’는 그 사건과 후행 사건 사이의 시간적 간격이 있을 경우에 사용되는 것으로 보인다.



目次

1. 初めに
2. 先行研究
3. 調査対象と方法
 - 3.1. 対象となる資料
 - 3.2. 対象となる用例
4. 『種徳新編諺解』の用例分析－終止形－
 - 4.1. 会話文および被引用文

- 4.2. 地の文
- 4.3. ‘-았더-’について
5. ‘-니’接続形の場合
 - 5.1. 会話文
 - 5.2. 地の文
 - 5.3. ‘-았더-’について
6. まとめ

1. 初めに

近世朝鮮語¹の動詞の過去と関連する形式として、先行研究では‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-았-’などの語尾が挙げられている。本稿では特に18世紀後半の時期におけるそれら諸形式の使い分けに関し、『種徳新編諺解』の分析を通して考察する。以下では『種徳新編諺解』を分析の対象とする理由を述べ、各用例を終止形の場合と接続形の場合に分けて取り上げる。

2. 先行研究

近世朝鮮語において動詞の過去と関連する諸形式に関する記述は、국립국어연구원 (1997), 이광호 (2004), 許雄 (1979, 1981, 1982), 최동주 (2002 a, b)などを参照することができる。ここでは紙幅の都合上、それぞれの研究を詳しく取り上げることはできないが、それぞれの形式がどのように使い分けられていたのか、という点についてはより詳しい研究が必要である。また、用例の扱いに関し、様々な資料の用例を取り混ぜて扱うのではなく、それぞれの出典の特性を踏まえて扱う必要もあると思われる。

3. 調査対象と方法

3.1. 対象となる資料

本稿では『種徳新編諺解』を考察の対象とする。『種徳新編諺解』の刊行時期は未詳であるが、1758年に

漢文本が刊行された直後か遅くとも正祖代には諺解も刊行されたと推定されている（洪允杓 1993: 376）。この文献は領議政を務めた金瑬（1580~1658）が徳行の手本となる逸話を古書から集めた『種徳新編』を、18世紀に朝鮮語に訳したもので、上中下の三巻二冊に180話が収められている。冒頭に御製序、御製文貞公金瑬致祭文、種徳新編本序が、終わりに題種徳新編後がそれぞれ収められているが、本稿ではそれらを除いた本文（180話の逸話の部分）のみを検討対象とする。書誌情報などの詳しい情報は洪允杓（1993: 376-387）を参照されたい。

『種徳新編諺解』を取り上げる理由は、当文献に各形式が比較的まんべんなく用いられているためである。18世紀に刊行された他の文献と比較してみると、例えば『闡義昭鑑諺解』と『明義録諺解』では‘-더-’の分布する語彙に偏りがあり、また『五倫行実図』、『十九史略諺解』では‘-았-’の使用が限られている。したがって本稿では、‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-았-’の用法を比較し考察するのに『種徳新編諺解』を対象にし、後日他の文献との比較を行うことにする。

3.2. 対象となる用例

用例の調査においては動詞の終止形および‘-니’接続形を対象とし、連体形の例や‘이다’, ‘있다’, ‘없다’などの語彙の例は除外する。なお‘-았-’の例として‘했엇다’のような形の他に、‘했엇느니라’のような形における‘-느-’は本来の機能がいないものと

看做し(최동주 2002 a: 130), これも用例に加える。用例は利用できる電子テキストを適宜修正しつつ収集し、影印本やオンラインで公開されている画像と対照して確認する。

4. 『種徳新編諺解』の用例分析—終止形—

4.1. 会話文および被引用文

『種徳新編諺解』の会話文に使用されている形式は‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-앗-’, ‘-앗더-’であるが、主に使用されているのは‘-앗-’である。以下、各形式の用法を見てみよう。なお, ‘-앗더-’については後述する。

まず指摘できるのは‘-앗-’が会話文を中心に現れるという点である。

1. 내 다른 사람이 다시 볼가 저히 이의 죽여
므뎡느이다 (他の人が見てしまうかと思ひすでに
殺して埋めました / 吾恐他人復見已埋之也) <上
1a>²
2. 문정공이 곶오디 엇디 비예 시른 보리를 주지
아니호뇨 요뵈 곶오디 이의 주엇느이다 (文正公
が曰く、どうして船に積んだ麦を与えなかったの
か。堯夫が曰く、すでに与えました / 文正曰何不
以麦船付之堯夫曰已付之矣) <上 29a>

『種徳新編諺解』の会話文においては、過去の出来事を表すのに‘-앗-’のみが用いられており, ‘-Ø-’は用いられていない。程度の差はあるが、このような傾向は『種徳新編諺解』だけに限ったことではなく、他の『闡義昭鑑諺解』, 『明義録諺解』, 『五倫行実図』, 『十九史略諺解』など同時期の他の文献でも同様にも見られる。会話文を中心に用いられるということから, ‘-앗-’は口語的な表現であると考えられる。

次に, ‘-더-’は会話文には3例のみ見いだされるが、どれも発話者が目撃してきた第三者の行動について報告する際に用いられている。

3. 호인이 혼 새 무덤에 니르러 제를 버려 우르되

슬허호디 아니호야 제물을 짓고 즉시 무덤 마으로
순행호야 다 서로 보고 웃더이다 (胡人が新しい
墓に至って祭祀を行い泣きつつも悲しむそぶりは
見せず、祭祀を片付けてまた墓のそばを巡りなが
ら互いに笑っていました / 胡至一新塚設奠哭不哀
亦撤奠即巡行塚旁咸相視而笑) <下 54b>

上記の(3)は話者(役人)が第三者(盗賊たち)の行動について、自分の目撃してきた出来事を報告している例である。これに対し, ‘-앗-’には(2)のように発話者自身の行動について述べる用法も見られる。

さて, 『種徳新編諺解』において‘-Ø-’が会話文に使用されないと述べたが、実はこれは疑問や否定を除いた場合のことである。言い換えると、会話文であっても疑問や否定の場合には‘-Ø-’が使用されているということである。したがって、会話文のうち、疑問・否定の場合には‘-Ø-’が‘-앗-’と共存していると言える。そこで疑問を表す会話文の用例を調べてみると、通常の場合には‘-앗-’と‘-Ø-’の両者が用いられるが、相手を非難したり反問したりする際には‘-Ø-’が用いられるようである。

4. 기드런디 수일이라 엇디 오기를 늦게야 호뇨 (數
日待っていた、どうして来ることを遅くしたのか
/ 翹望數日何來晩也) <上 11b>

(4)は単なる疑問ではなく相手に対する非難や反問の意味があることが読み取れる。すなわち, 엇디 を伴って「どうして遅く来たのか、もっと早く来るべきだ」などといった意味に解釈できる。これに対し, ‘-앗-’にはこのような例はなく、全て単なる疑問を表している。최동주(2002 b)では‘-Ø-’について、後期近世語では疑問文と被引用文に過去としての用法が保たれていたと述べている。そうであるなら『種徳新編諺解』において、通常の場合に使用されている‘-앗-’は‘-Ø-’の用法を侵食しているものと考えられ, ‘-Ø-’は辛うじて反問を担当する形式として残っていた、と言えそうである。

さて、反問について、伊藤 (1994: 16) は『三綱行実圖諺解』の分析において「動詞述語が指し示す行動そのものは既に話者が知っている事実であり、そのような行動の理由を尋ねることで主体の性質や行動の質的側面が注目される」と述べている。つまり、反問において重要なのは出来事が起きたのが過去であるということではない。『種徳新編諺解』の会話文の例ほとんどが‘-앗-’により過去を表していることを考えると、少なくとも会話文において過去を表す‘-Ø-’の意味はかなり弱まっており、そのため過去かどうかあまり重要でない反問の文脈に辛うじて残っている、と考えられないだろうか。

次に、『種徳新編諺解』においては‘-ㅎ-’などによって引用される位置においても‘-앗-’と‘-Ø-’が用いられている。

5. 체 지아비를 죽이고 인ᄃ야 불을 노하 집을 툇와 거죽 일ᄃᄃᄃ 지아비 불에 타 죽었다 ᄃ리 이시니 (夫を殺し火をつけて家を燃やし偽って夫が焼死したと言う妻がいたのだが/有妻殺夫因放火烧舍乃詐称火烧夫死) <下 69a>
6. 그 동당 수십인이 이서 이ᄃ 더편 언덕의서 괴악ᄃ야 모ᄃᄃᄃ ᄃ거닐 (その仲間がすでにあちら側の岸に集合しているというので/有同党者數十輩已於彼岸期集) <下 50a>
7. 노복을 가도와 형벌노 협박ᄃ니 후 닐오ᄃ 두협에 굶초ᄃᄃᄃ ᄃ며 후 닐오ᄃ 물 속에 더ᄃᄃᄃ ᄃ야 (下僕を捕えて責めたところあるものは肥溜めに隠したと言いあるものは水中に投げたと言い/拘繫僕隷脅以刑辟或云藏於糞壤或云投於水中紛紛枉撓結成其獄) <下 41b>
8. 군ᄃ 두네 나가 도라오ᄃ 아니ᄃ니 영에서 뵈호되 도망ᄃᄃᄃ ᄃ거닐 (寶禮という兵士が出て行き戻って来なかったので軍営では逃亡したと看做したが/寶禮魏護軍營士寶禮出不還營以為没身) <下 63b>

(5) と (6) は‘-앗-’の例, (7) は‘-앗-’と‘-Ø-’

が一つの文脈に相次いで使用されている例, (8) は‘-Ø-’の例である。(6) は発話時より以前に行われた動作の結果状態が発話時と同時に存在しているとも考えられる。これらの‘-앗-’と‘-Ø-’の例は、どれも発話時より以前に行われた出来事に言及するものであるという点で共通しており、その点では違いがないように思える。特に (7) では同じ文脈に‘-앗-’と‘-Ø-’が相次いで現れているが、それぞれ「肥溜めに隠した」と「水の中に投げた」のように解釈でき、両者に違いがないように見える。しかし、共起する語彙を見ると、‘-앗-’は限界的な (telic) 動詞と多く用いられている一方、‘-Ø-’には非限界的な動詞が多く用いられている。すなわち、上の例の‘죽- (死ぬ), 묻- (集まる),’などの動詞は限界的なものである。その他‘-앗-’と共起している動詞は‘가져오- (持って来る), 굶초- (隠す), 내- (出す), 니를- (至る), 닌- (被る), 도적맞- (盗まれる), 드려오- (入って来る), 밋고- (替える), 서- (立つ), 신설ᄃ- (伸雪する), 얻- (得る), 일우- (成し遂げる), 잃- (失う), 엇디ᄃ- (どのようにする), 잡- (掴む), 죽이- (殺す), ᄃ- (する)’などがある。これらの語彙は‘-ㅎ-, 엇디ᄃ-’を除けば皆限界的な動詞である。一方で‘-Ø-’と共起する動詞を見ると、上の例の‘도망ᄃ-’を含め非限界的な動詞が多い。‘-Ø-’と共起している動詞は‘가- (行く), 괴은ᄃ- (欺隠する), 더ᄃ- (投げる), 뒤ᄃ- (遅れる), 벗기 (逃れさせる)-, 붓그려ᄃ- (恥じる), 쓰- (使う), 얻- (得る), 탄복ᄃ- (歎服する), 항거ᄃ- (抗拒する)’などであるが、‘더ᄃ-, 벗기-, 얻-’以外は非限界的な動詞である。したがって、被引用文における‘-앗-’と‘-Ø-’の用法に関しては、‘-앗-’は限界的な動詞と多く用いられ、‘-Ø-’は非限界的な動詞と多く用いられる、と言うことができる。

4.2. 地の文

『種徳新編諺解』の地の文には、‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-앗더-’などが使用されている。会話文と異な

り, ‘-았-’の使用は見られない. ‘-았더-’については後述することとし, ここからは主に ‘-Ø-’と ‘-더-’の比較を行う. 地の文における ‘-Ø-’と ‘-더-’の用法は大きく分けて, ①物語テキストにおける事件と事件の間の論理的また時間的な関係を示すための前景:背景の使い分けとして説明できる場合と, ②前景:背景の使い分けでは説明できない場合がある.

ここで用例を取り上げる前に, 物語テキストの前景:背景に関連する先行研究を見てみよう. 崔東柱(2002 a: 126, 132)では, 前期近世朝鮮語において動詞の過去を表わす形式に ‘-았-’が追加されはしたもの, アスペクト的な対立を成す ‘-Ø-’と ‘-더-’が中期語から引き続き使用されていたと述べている. すなわち ‘-Ø-’は「話者の視点が状況の外部にあること」を表わし, ‘-더-’は「話者の視点が状況の内部にあること」を表わすというものである. 中期語の ‘-Ø-’と ‘-더-’を同様に扱う見解は, 崔東柱(1995), 이토(2009), 박진호(2011)などに見られる. 崔東柱(1995), 이토(2009)では中期語の物語テキストにおいて ‘-Ø-’が主に前景を表わして物語の時間を進める役割を果たすのに対し, 物語の時間を進めない背景は主に ‘-더-’によって表されることから, 前者を完了相ないし aorist, 後者を非完了相ないし imperfect としている³.

これらを参考にしつつ『種徳新編諺解』の地の文の用例を調べると, ‘-Ø-’には背景を表す例は見られない. 一方, ‘-더-’には①前景:背景の使い分けとして説明できる場合と, ②そうでない場合がある. まず, ①前景:背景の使い分けとして説明できる例を挙げる. その際 ‘-더-’が必ずしも背景のように見えない場合であっても, 習慣や繰り返しなどの不定の動作を表している例は合わせて扱うことにする.

9. 흥남과 첨해 업서 비 오면 우산을 바티더라 꺾귀 관찰식 되야 정티를 너르게 해야 (家に廊と廡がなく雨が降れば傘をさすのであった. 號州の觀察使となり政治を寛くし/無廊廡霖張蓋 為號州觀察使政治以寛) <中 11b-12a>

10. 당원제 무양 령을 하야 덕으로써 아티를 교훈하니 빅성이 심각히더라 (張元濟が武陽令となり徳を以て人々を教訓したので人々から慕われていたのであった/張元濟為武陽令以徳教訓下百姓懷之) <下 48a>

これらは ‘-더-’が背景, もしくは不特定の動作を表していると考えられる例である. (9)は崔郞という人物の家について述べ, その生活態度や習慣を表すことで, 後に続く内容のための背景となる情報を提示している. (10)の ‘빅성이 심각히더라’も同様に, 具体的にいつ誰がそのような行動をとったか, ということが重要なのではなく, この後述べられる事件において活躍する主人公の性質を表すことで, 背景となる情報を提示していると言える.

次に同じ語彙で ‘-Ø-’と ‘-더-’の両者が見られる例を挙げる.

11. 후의 벼슬이 니부상서의 니르니라 (後に吏部尚書の官職に至った/後官至吏部尚書) <中 10a>
 12. 이윅고 또 풀거늘 또 샅다가 도로 주기를 수々츠의 니르더라 (やがてまた売ったのでまた買ってから返してやること四度に至った/而又賣既買又還至於數四者) <中 33b>
 13. 제 조츠샤 이에 다 옮겨 영천 던뉴의 두다 (帝が聞き入れて潁川陳留に置いた/帝從之乃移置潁川陳留) <中 4b>
 14. 매로 터 못디 아녀서 의심된 옥스를 상히 결단히 옥관이 왕왕히 뜻을 두더라 (むち打って訊問せずに疑わしい事件をいつも決めるので獄官がしばしば意を置いた/不訊考而疑獄常決獄官往往属意焉) <中 19b>

(11), (12)はどちらも ‘-니르-’の例であるが, ‘-Ø-’が使われた(11)は官職に就くという特定の出来事に言及するものであるのに対し, ‘-더-’が使われた(12)は, お金に困った人の土地を買ってから無償で返してやる, という行為を主人公が何度も繰り返したとい

う逸話を紹介しているものである。また‘두-’の例(13)と(14)では、人々の配置に関しては‘-Ø-’を使用しているのに対し、‘-더-’が使われた(14)では‘왕왕히’という副詞を伴って度々生じた出来事を表している。

このような例では、地の文における‘-Ø-’と‘-더-’の使い分けを、中期語の場合と同じように前景：背景の違い、もしくは特定：不特定の違いで説明することができる。しかし、上で②としたように、そのような仕方で説明できない例も存在する。

15. 약이 이에 현을 죽인 죄를 승복하니라 (若が頭を殺した罪を認めた/若乃首殺頭之罪) <下 64b>
16. 마마니 아전을 보내여 잡아오니 드디어 그 죄를 승복하니라 (ひそかに人を遣わして捕まえて来させたところその罪を認めた/黙遣吏捕獲遂伏其罪) <下 58a>
17. 절에 나아가 큰 직을 하야 님군을 위하야 복을 비니라 (寺に行き大きな祭祀を行い林君の福を祈った/就仏寺大齋為林君祈福) <下 20a-b>
18. 가직을 기오려 중을 밥 먹여 약슈를 위하야 복을 비니라 (財産を傾けて僧に飯を食わせ若水の福を祈った/傾家資以飯僧為若水祈福) <上 37a>

これらの例では‘-Ø-’と‘-더-’に同じ語彙が使用されている。(15)と(16)は‘승복하-’がそれぞれの話の最後の部分に使用されており、‘-Ø-’形と‘-더-’形のどちらも特定の出来事を表わしている。(17)と(18)はどちらも‘빌-’という語彙が‘-Ø-’形と‘-더-’形で使用されているが、両者の違いがはっきりしないように思われる。

‘-Ø-’形と‘-더-’形の違いを前景：背景の違いや、特定：不特定の違いから説明できないこのような例について、本稿では語り手の視点の違いを表現する効果があるのではないかと考える。すなわち、‘-Ø-’形と‘-더-’形では後者の方がより登場人物に近い、もしくは場面の中に入り込んで語る印象を与えるのではないか、ということである。このような考えを示唆する、

次のような例がある。

19. 그 일흠을 집에 뼈 골오되 모년 모일의 김포
님적이 비러 자고 가다 하고 드디어 가니라 (その
名前を家に書いて曰く、某年某日に劔浦林積が泊
まって行くといつて出て行った/掲其名于室曰某
年某月日劔浦林積假館遂行) <下 19b>
20. 공이 (中略) 문득 보니 흰 옷 닙은 녀지 데첩을
불전 난간 우회 노코 빌기를 오래 하다가 절하고
가더라 (公が (中略) ふと見るとある白い服を着
た女が緹褶を仏殿の欄干の上に置いて長らく祈つ
てから拜んで去って行った/公 (中略) 忽見一素
衣婦人致緹褶於僧伽欄楯之上祈祝良久瞻拜而去)
<上 10a>

これらは‘가-’の用例であるが、『種徳新編諺解』の地の文には(19)のような‘-Ø-’形が5例、(20)のような‘-더-’形が2例見られる。いずれの場合においても登場人物が物語の場面から退場しているが、退場する人物に違いがあるようである。すなわち、‘-Ø-’形の場合はその話の主人公が退場するのに対し、‘-더-’形の場合は主人公のいる場面から別の人物が退場しており、まるでその退場を主人公が見ているかのようである。これらの比較から、‘-더-’形は主人公の視点から、もしくは主人公に近い所から語る際に用いられるのではないかと考えられる。

別の例も考えてみよう。次に挙げるのは引用の‘하-’の例である。

21. 텃지 괴이히 너기샤 그 짜홀 일흠하야 골오되
옥전이라 하시니라 (天子が不思議にお思いになりその地を名付けて曰く玉田と仰った/天子異之名其地曰玉田) <上 2b>
22. 사회를 글을 주어 골오되 다른 날 분직홀 제
열히서 세흔 아들을 주고 닐곱은 쫄을 주라
하니라 (婿に文を与えて曰く、いつか財産を分けるときには十分の三を息子に与え七は娘に与えろと言った/與婿書曰他日分財即以十之三與子而七

與女) <下 27b>

23. 너를 아들 세흔 주어 조포를 띠고 금색을 썩게
 ㅎ엇다 ㅎ더라 (お前に息子三人を与え紫袍をま
 とい金の帯を締めるようにしたと言った/賜汝三
 子衣紫腰金) <中 46a>
24. 창이 곁오디 부군이 병의 곤하야 말들
 그릇하야시니 낭군은 의심치 말나 ㅎ더라 (敝が
 曰く、府君が病がひどく言葉を間違っただけであ
 るから郎君は疑わなくてよいと言った/敝曰府君
 疾困謬言爾郎君無疑) <上 5b>

『種徳新編諺解』の地の文には (21), (22) のよう
 な ‘-Ø-’ 形が 17 例, (23), (24) のような ‘-더-’ 形が
 35 例見られるが, 両者はそれによって引用されるも
 のが異なるようである. すなわち, ‘-Ø-’ 形の場合(21)
 のように命名に関するもの(‘-이라 하다’ など)が半
 数以上であるのに対し, ‘-더-’ 形の場合は (23), (24)
 のように会話の例が多く見られる. また, (22) と (24)
 は共に命令を引用しているが, ‘-Ø-’ 形が用いられた
 (22) の場合, ‘글을 주어’ という表現があることから
 も分かるように文書による命令である. 命令の引用に
 ‘-Ø-’ 形が用いられたものはこの他さらに 2 例あるが,
 一つは (22) と同様に文書による命令であり, もう一
 つは自らが発した命令を再び書簡中で引用しているも
 のである. これに対し, ‘-더-’ 形の場合は (24) の
 他にもう 1 例が存在するが, どちらも口頭での命令で
 ある.

このように『種徳新編諺解』の引用の ‘-하-’ につ
 いては, それが引用するものが単なる命名の例がある
 いは会話の例か, また, 命令を引用する場合には文書
 による命令か口頭での命令か, といった点で ‘-더-’
 形の方が会話との関わりがより強く, 登場人物との距
 離が近づくとと言えないだろうか. そうであるならば,
 やはり物語において ‘-더-’ 形が場面の中に入って叙
 述する印象を与える, と考えられる.

次の例は取り調べにおける自白と関連のある動詞の
 例である.

25. 쇼를 글너 그 가네티로 두라 하니 쇠 본주의 집을
 아네티라 도적이 복죄하다 ((牛泥棒の事件におい
 て盗人と所有者の双方が自分の牛だと主張してい
 るので) 牛を引いてきて自ら行くようにしろと
 言ったところ牛は主人の家を分かっており盗人が
罪を認めた/令解牛任其所去牛知本主所居盜者伏
 罪) <下 56a>
26. 조문이 늦빰디 다르고 응디하미 절츰을 일히 이에
 머리를 두드려 네 죽인 죄를 조슈하니라 (子文と
 いう者が顔色が変わり受け答えもしどろもどろに
 なり叩頭し禮という人物を殺した罪を認めた/子
 文色動應對失節於是叩頭首殺禮之罪) <下 64a>
27. 패 이에 당스를 꾸지저 곁오디 네 직물을 탐하야
 아히를 엇고져 하니 엇지 도곰이나 상할 배
이슬가 넘너하리오 이 일이 명백하디 하니 당식
복죄하더라 (覇が上の嫁を叱って曰くお前は財産
 目当てに子供を手に入れようとするだけなのだか
 らどうして(子供が)傷つくだろうかと心配など
 するだろうか. 事ここに明らかである, と言った
 ので上の嫁が(下の嫁の子を横取りしようとした)
罪を認めた/覇乃叱長姁曰汝貪家財欲得兒寧慮頓
 有所傷此事審矣長姁伏罪) <下 34b>
28. 공이 곁오디 엇디하야 님의 집 쇼 혀를 베히고 쏘
고하노뇨 하니 도적이 놀나 복죄하더라 (公が曰
 く, どうして他人の牛の舌を切ってまた告げるの
か, と言ったので盗人が驚き罪を認めた/公曰何
 為割某家牛舌而又告之盜者驚伏) <下 57a>

これらの例は取り調べにおける自白という, 特定の
 場面を表している. ‘복죄하-’, ‘조슈하-’ はどちら
 も段落の最後にあり, ‘-Ø-’ のものも ‘-더-’ を伴う
 ものも, 物語の時間を進める前景と解釈できる. 両者
 の違いは何であろうか. 本稿では両者がやはり場面
 の中に近づいて語るか, そうでないか, の違いである
 と考えたい. その理由は, (25), (26) のような ‘-Ø-’
 の例では 6 例全てにおいて取り調べを行う人物と取り
 調べを受ける人物の間でなされた会話が無いのに対
 し, ‘-더-’ を伴った (27), (28) のような例では 4 例

全てにおいてそれらの人物の間に会話があるためである。すなわち、会話が記録されているために、取り調べの過程をより詳しく扱い、まるでその場面の中に一緒にいるかのような印象を与えるのだと考える。

以上のように、地の文の ‘-더-’ および ‘-Ø-’ の用例は、一部は前景と背景、もしくは特定と不特定といった違いによって使い分けを説明できるものであるが、一方でそのような仕方では両者の違いを説明できない例も存在する。後者の場合における ‘-더-’ について、本稿では、動詞 ‘가-’ の例、引用や自白に関する動詞の例などの検討を通じ、主人公に近い視点や場面の中に近づいた叙述を表すのではないかと考えた。このような用法は、中期語との関連においても説明できる。すなわち、先行研究で述べられているように中期語において ‘-더-’ が未完了アスペクトの特徴を持っていたとすると、出来事を内部から捉えるという未完了アスペクトの特性が転用され、物語の内部にいる人物の視点から出来事を表わすようになったのではないだろうか。その結果、物語において前景となる出来事をその場面に近づいて叙述する用法が生じたものであろう。

4.3. ‘-았더-’ について

これまで取り上げてこなかったが、『種徳新編諺解』には ‘-았더-’ という形式も用いられている。用例が多くないため、いくつかの用法を挙げるだけにとどめておく。まず、会話文の例から示す。

29. 령이 굴오되 사람이 외를 도적 흘 제 모습
광주리를 가졌더뇨 (令が曰く、その人が瓜を盗む
ときにどんなかごを持っていたか/ 令曰人盜瓜絜
何筐篋) <下 57b>
30. 회 품출하야 갈 세에 친빈들이 도문 밖기
가 보내여 굴오되 그되 왕보의 벼슬 흘가
뜻혔더니라 (祐という人物が左遷されて行く
とき親戚や知り合いが都門の外へ送りに行つて曰
く、あなたは王溥が就いていた官職をもらうもの

だと思っていた/ 祐赴貶時親賓送于都門外曰意君
作王溥官職矣) <中 18a>

上の例において、(29) は目撃と関係があると思われる。すなわち、疑問文において聴者が何を目撃したかを尋ねる場面である。過去の結果状態について尋ねるという点で、‘*가지더뇨, 가지뇨’ のような場合とは異なり、目撃したことについて尋ねるという点で ‘*가졌뇨’ のような場合とも異なっていると考えられる。また、(30) は左遷させられる主人公に対して、その将来を嘱望していた知人たちが見送りつつ言う場面であるが、「そのように考えていたがそうではなくなってしまった」のような言外の意味が込められていると言えるだろう。

次は地の文の例である。

31. 그 어미 증의 잇는 곳을 츠즈니 증이 불셔
횡히앗더라 (その母が曾の泊まっていた所へ訪ね
て行ったところ曾はすでに旅立っていた/ 其母復
訪曾之所館而曾已行矣) <中 22a>
32. 송 태조 스신으로 위궐에 보낼시 닐너 굴오샤되
스신으로 도라오면 경을 왕보의 벼슬을 주리라
하시니 위궐 절도스 부언경은 태종 부인의
부친이라 노는 말이 이서 상의 들니엇더라 (宋の
太祖が使いを魏州に遣わす際に曰く、帰還したら
卿に王溥の官職を与えようと仰った。魏州の節
度使である符彦卿は太宗の夫人の父親である。
噂が帝の耳に届いていた/ 宋太祖遣使魏州告曰使
還與卿王溥官職 魏州節度使不符彦卿太宗夫人之
父也 飛語聞於上) <中 17b>
33. 아비 죽어 기년이 못하얏고 계되 이시되 섬기기를
도로 아니하니 계되 분하고 애드르물 이기디
못하더니 그 후는 저기 플니엇더라 원일에 어미게
현슈하니 어미 아들을 잔을 준대 아들이 바다
마시고져 하다가 술에 독이 잇는가 의심하야 짜히
업티니 (ある人の父が亡くなって暮年になってお
らず、継母がいたのだが(継母に対して) 仕える
のが道になっていなかったので継母が憤って怒

りをこらえられずにいたのだが、その後は少し和らいでいた。元日に継母に献杯したところ継母が息子に盃を与えたのだが息子が受けて飲もうとした際に酒に毒が入っていないかと疑い地面に注いだところ / 父亡未暮有繼親在奉之不以道母憤悲不勝後稍解因元日上壽於母母賜觴於子子受之欲飲疑酒有毒覆之於地) <下 64b>

これらの例の中、(31)と(32)は出来事が叙述されている順番が、実際に生じた順番と異なると思われる例である。すなわち、(31)の実際の順序は「主人公の出立→(別の人物の)母親の訪問」である。また(32)は、(30)と同じ逸話の中で、主人公が派遣される際の皇帝とのやり取りが述べられた後、派遣先の魏州の節度使に不穏な噂があったという、派遣の理由を説明しているが、不穏な噂が皇帝に達したのは当然のことながら派遣決定よりも前であろう。(33)は物語の冒頭に用いられ、'-앗더-'までが、その後に述べられている毒殺未遂事件が生じた際の状況を示す、背景となっている。

このように終止形の'-앗더-'にはいくつかの用法があるように見えるが、用例が多くないため、中心となる用法や意味を一つに帰納するのは難しく思われる。ただ、これらの用法のいくつかは、現代朝鮮語の'-았었-'の用法と類似しているという点を指摘しておきたい。黒島(2015: 107)によると、'-았었-'の会話文における用法の一つに、「過去の事象や、予測、期待などを含めた思考に反することを暗示させる」というものがあるが、これは上述の(30)と類似している。また、'-았었-'の地の文の用法として、『「先行」のタクシス」(黒島 2014: 14)を表すものがあるが、(31)、(32)にも同様の用法が見られる。(33)では段落の冒頭における背景と述べたが、'-았었-'にも「前提」、すなわち「これから語る出来事の以前に、このようなことがあったのだと<였었다>で表すことで物語の「前提」となる背景を表す」という用法があるという(黒島 2014: 21)。ただし、その他に目撃や結果状態と関係する用法もあり、より詳しい調査が求めら

れる。

5. '-니' 接続形の場合

'-니' 接続形における各形式の用法を会話文と地の文に分けて述べる。

5.1. 会話文

会話文に使用されている形式は'-Ø-', '-더-', '-았-', '-았더-'である。これらを'-히-'で代表させて示せば、'-히니', '-히더니', '-히야시니', '-히았더니'などである。以下、各形式の用法について述べるが、'-았더-'は後で扱う。

まず、'-았-'であるが、この文献において'-았-'は主に会話文に用いられている。

34. 내 동악으로써 와시니 (中略) 상데 특별이 명히사 남녀 각 일인을 주시니니라 (私は東嶽から来たのだが(中略)上帝が特別に命じられて男女各一人をお与えになったのである / 我自東嶽来(中略)上帝特命賜男女各一人) <下 6b>
35. 내 두 머리 잇는 뱀얌을 보와시니 오래디 아녀 죽을가 저히 히니이다 (私は二つの頭のある蛇を見てしまったのでもうすぐ死んでしまうのではないかと恐れています / 今日吾見兩頭蛇恐去死無日矣) <上 1a>

上記のような会話文の'-았-'は、'-았-'の用例全体 59 個のうち 52 個を占めている。非会話文の例は 7 個であるが、その中でも語りの地の文に使用された例は 2 例に過ぎない。残りは過去ではなく現在を表す例と、一人称の文に使用されている例である。したがって、'-니' 接続形において過去を表す'-았-'はほぼ会話文に限られていると言え、これは終止形の場合とも一致する。

次に、'-니' 接続形の会話文において'-았-'と共存する形式として'-Ø-'があるが、両者の違いは終止

形の場合と同じく共起する語彙の傾向に見られるようである。すなわち、共起する語彙として‘-앗-’には限界的な動詞が多い⁴。一方、‘-Ø-’には非限界的な動詞が多い⁵。

36. 나는 난손의 아버라 그디 은혜 감격하니 엇디 써
감하리오 (私は蘭蓀の父である。あなたの恩恵に
感激したのだがどのようにお返ししたらよいだろ
うか/余蘭蓀之父也 感君之恩何以報之) <上 15b>
37. 저물게야 하 아는 사를을 맛나 술을 먹으니 술이
취하야 문득 일헛느니라 (夕暮れ時に一人の知り
合いに出会い酒を飲んだところ酔って失くして
しまったので/暮以一相知置酒酒昏忽失去) <上
21a>
38. 옥띠 하나와 서띠 하나를 비러 어드니 (中略)
불헛하야 이곳의서 일히시니 (玉帶一つと犀帶一
つを借りて手に入れたのだが(中略) 不幸にも
ここで失くしてしまったので/假得玉帶一犀帶一
(中略) 不幸失去於此) <上 10b>
39. 쇼 도적을 잡아시니 촌 중 쇼를 다 모화 각각
소종늑를 므리리라 (牛泥棒を捕らえたので村中
の牛を全て集めそれぞれがどこから来たのかを問
おうと思う/捕盜牛賊召村中牛悉集各問所從來處)
<下 48b>
40. 공이 그 그르를 술온대 쉬 이미 문서를 써시니
맛고디 못하리라 하거늘 (公がその過ちを述べた
ところ帥がすでに文書を書いたので変えられない
だろうと言ったので/公白其誤帥已著署不易也)
<下 20b>

(36) と (37) は非限界的な動詞が使われた‘-Ø-’の例であるが、この他‘-Ø-’と共に使われている非限界的な動詞語彙は‘마르티- (教える), 근청하- (懇請する), 밍세하- (盟誓する), 슬피- (調べる), 싱각하- (考える), 도라보- (振り向いて見る), 듣- (聞く), 맛나- (会う), 베풀하- (奉職する), 청하- (請う), 탐하- (貪る), 산두- (計算する)’などである。一方、(38) と (39) は限界的な動詞が使われた

‘-앗-’の例である。その他‘결단하- (判断する), 두- (置く), 던하- (尽きる), 받- (受ける), 범하- (犯す), 보내- (送る), 사르- (救う), 상하- (傷つける), 얻- (得る), 업디- (服する), 오- (来る), 잃- (失う), 잡- (掴む), 주- (与える), 죽- (殺す)’などの語彙がある。また、(40)は被引用文の例であるが‘쓰- (書く)’という語彙に‘문서를 (文書を)’という限界が与えられて‘-앗-’が使用されている。このように、‘-앗-’と‘-Ø-’には語彙の点である程度の傾向があると思われるが、しかし例外もある。

41. 내 마춤 서울 편지를 어드니 이미 다른 벼슬을
하야 가히 이에 머쁘디 못하리라 (ちょうど都から
の手紙を受け取りすでに別の官職に就いている
ためここには留まれそうにない/吾適得京書已除
別官固不可駐此也) <中 14a>
42. 내 두 머리 잇는 브얌을 보와시니 오래디 아녀
죽을가 저하 하느이다 (再掲 35) <上 1a>

上の例において(41)は限界的な動詞に‘-Ø-’が使われているものであり、(42)は非限界的な動詞に‘-앗-’が使われているものである。これらは先に述べた傾向とは反対の組み合わせであるが、それでも全体的な傾向としては、やはり‘-앗-’と限界的な動詞が、‘-Ø-’と非限界的な動詞が多く使われると言えるだろう。先に述べた終止形の被引用文の場合と同様、このような傾向が現れる理由については未だ不明であるが、もしこの終止形および接続形の観察結果が妥当であるならば、‘-앗-’の文法化に関して次のような疑問が提示できるかもしれない。すなわち、もしかすると動詞の中でも‘-앗-’と結合しやすい語彙のグループが存在したのだろうか、また、‘-앗-’の文法化が進行した順序と、結合する動詞との間に関係があったのだろうか、という点である。管見では従来、‘-앗-’の文法化について、その時期や結合する品詞に関する研究はなされてきたものの、このような点についての詳しい議論はあまりなされていないように思われる。

次に、会話文に現れるもう一つの形式である
‘-더니’について見てみよう。

43. 금 은 약간을 꾸어 장춧 아뵈 죄를 속히려 히더니
저를게야 히 아는 사람을 만나 술을 먹으니 술이
취히야 문득 일헛는디라 (金銀のいくらかを借り
てこれから父の罪を贖おうとしたのだが、夕暮れ
時に一人の知り合いに出会い酒を飲んだところ
酔って失くしてしまったので / 貸金銀若干將贖父
罪暮以一相知置酒酒昏忽失去) <上 21a>
44. 녀조로써 문호를 부디힐 계규를 히려 히더니 이의
벼슬을 일히시니 전당을 벼탈거시 업다 (娘に
よって門戸を保とうと思っていたのだが, (娘婿
が) もう官職を失ってしまったので前途の望みが
ない / 以女為門戸計既失官缺前望) <中 34b>

‘-더니’の用例が全体で82個ある中、このような
会話文の例は僅か5個である。(43), (44)は‘-려
히더니’が使われているが、これらは「何かをしよう
としたがうまくいかなかった」のような意味である。
それぞれ、「お金で罪を贖おうとしたのに酔って紛失
してしまった」、「娘婿に期待していたのに望みがな
くなってしまった」のように解釈できる。同様の例はも
う1例ある。ここでこのような用法を仮に「逆接」と
呼び、‘-Ø-’の場合、すなわち‘-려 히니’の例と比べ
ると、逆接の意味は会話文の‘-려 히니’には見いだ
されないようである。

45. 짐독으로써 사람을 죽이려 히니 상턴이 엇디
도오리잇고 (酖の毒で人を殺そうとするのだから
どうして天の助けがあるだろうか / 以酖殺人上天
何祐) <下 65a>
46. 두 장췌 스를 보내여 금뵈으로써 년시귀 드리고
또 흰 기 히나홀 주어 곶오디 내 장춧 이 성을
뭇디르려 히니 부인은 이 기를 문에 쪼조라 내 쪼
이의 스줄을 계딕히야 범티 말나 히얏노라 (二人
の将が使いを送って金帛を練氏に差し上げ、また
白い一つの旗を与えて曰く、私はこれからこの城

に攻め込もうと思うので夫人はこの旗を門に差し
ておきなさい。すでに兵たちに警告を与えて攻
撃しないようにと言っている / 二將遣使以金帛遣
練氏且以一白旗授之曰吾將屠此城夫人植旗于門且
吾已戒士卒勿犯也) <中 42a>

(45)は「どうして～だろうか、(いや、そうではない)」
という表現が続いていることから分かるように、判
断の理由を表している。また(46)は「今から～しよ
うと思っているので」のような意味に解釈され、過去
を表すものではない。

また、‘-려 히-’以外の語彙と共に使用された
‘-더니’の例であるが、解釈の仕方によって逆接的で
あるともそうでないとも考えられる。

47. 그 아비 벼슬히더니 나라 직물들 거느려 오다가
흠축히야시므로 첩을 프라 갑히려 히다 히거늘
(その(女の)父が官職に就いていたのだが国の
財物を率いて来る途中で不足が生じてしまったた
め娘(の私)を売って償おうとするのだと言うの
で / 其父有官因綱運欠折鬻妾以為賠償之計) <下
11b-12a>

(47)は‘-려 히-’以外の語彙と使用された‘-더니’
の2例あるうちの1つであるが、単に「彼女の父が官
職についていたときに」と解釈することもできる。し
かし、「官職に就いていたのに問題に巻き込まれてし
まった」のように考えれば逆接的な意味を読み取るこ
とも不可能ではない。

本稿ではこのような点を考慮し、‘-더니’には逆接
を表す用法があると考えたい。なお、筆者の調査では
会話文において‘-Ø-’および‘-앗-’に逆接を表す用
法は見いだされなかった。用例が少なく、一部は解釈
の仕方にも依存しているため、確実なことは言えない
かもしれないが、会話文の‘-더니’の主要な用法が
逆接であるとすれば、その点で‘-Ø-’および‘-앗-’
と異なっていると看做すことができる。

5.2. 地の文

『種徳新編諺解』の地の文の‘-니’接続形には, ‘-Ø-’, ‘-더-’, ‘-앗더-’ (‘ㅎ-’で代表させて示せば, ‘ㅎ니’, ‘ㅎ더니’, ‘ㅎ앗더니’など)が使用されている. ‘-앗더-’は後述することにし, まず‘-Ø-’と‘-더-’について述べる.

地の文における‘-니’と‘-더니’の用法を比較すると, 基本的には‘-니’が物語における前景を表し, ‘-더니’が背景を表すと言うことができる. なお, ‘-더-’によって表される背景は, 同時的なものだけでなく, 習慣・属性を表すものも含まれる.

48. 되 가지고 각덤으로 도라갓다가 아춤의 다시 가디고 가니 절 문이 비로소 열니고 보니 그 녀직 밧비 드라와 소리를 크게 ㅎ야 놀나 탄식ㅎ거늘 (度が宿に(ある女が寺に忘れて行った物)を持ち帰って翌朝再び持って行ったところ, 寺の門が開き, 見るとその女が慌てて走って来て大声をあげて驚き嘆いたので/度挈帰逆旅詰旦復携往寺門始闢觀婦人疾趨而至撫聲惋歎)<上 10a>
49. 엄태 강으로 가다가 고기 잡는 비를 만나 부르니 거복 오십을 잡아노라 ㅎ거늘 태 돈 오천을 주고 사 물의 노코 수십보를 가더니 그 고기 잡던 비이에 업더디고 (嚴泰が川で漁をする舟に出会い尋ねると龜を五十匹捕まえたというので錢五千を与えて買い取り水に放して数十歩を行ったところその漁をしていた船がひっくり返り/嚴泰江行逢漁舟問之云有龜五十頭泰用錢五千贖之放行數十歩漁舟乃覆)<上 6b>
50. 원뵈 탄식ㅎ기를 오래ㅎ다가 인ㅎ야 그 친척을 무려 그 외가를 아니 뉴시라 (元溥が長くためいきをついてからその女の親戚を尋ねたところ母方が分かったのだが劉氏であった/元溥太息久之因問其親戚知其外氏劉也)<上 15b>
51. 당시절의 범명뵈라 ㅎ는 재 (中略) 즈뵈 술수를 아더니 (中略) 스스^로 그 팔즈를 쥬수ㅎ고 닐오디 닌던 ㅁ을의 녹과 목숨이 다 진ㅎ리로다 (唐の頃

に范明府という者が占いに詳しかったのだが, 自らその運命を占って曰く, 来年の秋に禄と命が皆尽きるであろう/唐范明府者(中略)頗曉術數(中略)自課其命云来年秋禄壽俱盡)<上 17a>

(48)と(49)は‘가-’という動詞がそれぞれ‘-Ø-’と‘-더-’と共に使用されているが, ‘가니’は物語の時間を進めているのに対し, ‘가더니’は次の「船の転覆」という出来事と同時的な出来事を表している. ‘알-’の例(50)はやはり前景を表しているが, (51)は‘-더-’を伴って登場人物の属性を表している.

このように, 地の文における‘-니’と‘-더니’の用法は, 基本的には‘-니’が前景を表し, ‘-더니’が背景を表すと言えるが, 引用を示す‘ㅎ-’の場合はさらに説明が必要である. すなわち, 終止形における同じように, ‘-Ø-’と‘-더-’が引用の‘ㅎ-’と共に用いられているのだが, 終止形の場合, 被引用文に違いがあるのに対し, 接続形の場合にはそのような被引用文の違いが見られないようである.

52. 공이 굴오디 엇디ㅎ야 님의 집 쇼 혀를 베히고 쏘고ㅎ노 ㅎ니 도적이 놀나 복죄ㅎ더라 (公が曰く, どうして人の家の牛の舌を切って告げるのかと言ったので盜人が驚いて罪を認めた/公曰何為割其家牛舌而又告之盜者驚伏)<下 57a>
53. 체 굴오디 군이 ㅁ음 ㅁ미 이 긔티니 엇디 즈식이 업슬가 근심ㅎ리오 ㅎ더니 수월만에 체 ㅁ기 이셔 (妻が曰く, あなたの心遣いがこのようであるのだからどうして子ができないと心配する必要があるだろうかと言ったのだったが数月後に妻が身ごもり/妻曰君用心如此何患無子居數月妻有娠)<下 12a>
54. 내 집이 모든 사^름으로 더브러 긔티 죽고 홀노 살기를 원치 아니 ㅎ노라 ㅎ니 두 장쥬 그 말을 감동ㅎ야 드^되여 긔티다 (私の家は全ての人とともに死ぬのだ, 独り生き残るのは望まない, と言ったので二人の將官がその言葉に感動し遂にやめたのだった/吾家與衆俱死耳不願獨生二將感其

言遂罷) <中 42a>

55. 이제 그딴 슈흔이 장춧 딴하야시니 내 맛당이 그딴을 위하야 상데씩 청하리라 하더니 그 후 삼일의 다시 꿈을 어드니 (今あなたの寿命が尽きようとしているので私があなたのために上帝に願ひ出ようと言ったのだが, その三日後にまた夢を見て/今君壽限將盡余當為君請于上帝後三日復夢) <上 16a>
56. 즈운이 곶오딴 오년을 쇼을 먹일제 신고하야시니 진을 다스슬 주고 기여논 다 공을 주라 하니 일현이 그 명찰하를 항복하더라 (子雲が曰く, 五年の間牛の世話をしして苦勞したのだから璫に五頭を与え, 残りは皆恭に与えよと言ったので一縣がその明察に感服した/子雲曰五年養牛辛苦與璫五頭餘並還恭一縣伏其明察) <下 37b>
57. 내 아히 성넙하를 밋쳐 보디 못홀거시니 후의 맛당이 내 말노빠 니르라 하더니 명년 상부 경술의 과연 줄하디라 (私は子が成長するのを見ることができないだろうから, 後に必ず私の言葉として伝えるようにと言ったのだが, 明くる年の祥符庚戌に亡くなったのである/吾不及見兒之立也 後當以我言告之 明年祥符庚戌果卒) <中 22b>

(52) と (53) は疑問文, (54) と (55) は平叙文, (56), (57) は命令文をそれぞれ引用しているものである. このように, 接続形の場合には終止形のときのような被引用文の違いが見られない. しかし後続する節に注目すると, ‘-0-’ にはその言葉を聞いた相手や人々の反応, 例えば驚嘆や自白や称賛などが続く例が見られる. (52) の ‘도적이 놀나 복죄하더라’, (54) の ‘두 장쉬 그 말을 감동하야 드디여 굿티다’, (56) の ‘일현이 그 명찰하를 항복하더라’ などがそれである. このような反応は継起的なものと言える. 一方, ‘-더-’ にはそのような反応が続く例が見られず, むしろ, 後ろに時間の経過・隔たりを示す表現が見いだされる例が多い. (53) の ‘수월만에’, (55) の ‘그 후 삼일의’, (57) の ‘명년’ などがそれである. その他にも, 「及」の訳として ‘밋... 하매’ などといった

表現も使われる. このような ‘하더니’ は, 物語の時間を進めながらも, その発言がその後の出来事的前提もしくは伏線となり, その効果が継続している中で次の出来事が生じる, という一種の背景のような役割も果たしている.

このような ‘-더-’ の用法は, ‘하-’ の語彙的な特性により生じるものと考えられる. すなわち, ある出来事がその後の出来事のための前提や背景となる場合に ‘-더-’ が用いられるため, ある発言がその後の出来事ないし物語のための前提や背景となる場合にも ‘-더-’ が用いられるのであろう. しかし, 発言自体はいつまでも継続して行われる出来事ではないため, 発言の効果が持続していたとしても, その発言の行為自体は終わってしまっており, その効果の中で次の出来事が生じるときには, 発言があった時点から既にある程度の時間が経過してしまっていることになる. したがって, 時間の経過を示す表現が使われるのであろう.

5.3. ‘-앗더-’ について

‘-니’ 接続形の ‘-앗더-’ すなわち ‘-앗더니’ は会話文と地の文に用いられる. 本稿では ‘-앗더니’ を基本的には「その出来事の後に時間が経つこと」を表すと考え.

会話文の用例が少ないため, 地の文の検討を先に行う. 地の文における ‘-앗더니’ は, ① ‘-앗더-’ によって表される出来事が, 物語が展開する時間線上において前景となる出来事を表しつつ, 後続する出来事との間にある程度の時間が経過する場合, ②後続の出来事の背景となる状態を表す場合, のように分けることができる.

58. 도종이 (中略) 길마의 못고 앗더니 히 남죽하야 샤를 맛나 도라갈식 바야흐로 당마진 세라 물이 만하 그 므든 곳을 일하니 (道琮が (中略) 客死した友人を道の脇に埋葬して行ったのだが, 一年あまり後に恩赦を受けて戻る途中, ちょうど梅雨

の季節だったので水が多く埋葬したところが分からなくなっていたので/道琮(中略)瘞道左去歲餘遇赦歸方霖潦積水失其殞處) <中 8b>

59. 녀지 절하야 울고 그 하나흘 머므르믈 청히거늘 되 웃고 보내엿더니 그 후의 네 상 보던 자의게 나아가니(女がひざまずいて泣き(忘れ物を返してくれたお礼にと)その中の一つを残していくことを願い出たものの度は笑って(そのまま)行かせたのだったが、その後以前に占いをしてもらった者のところへ行ったら/婦人拜泣請留其一度笑而遣之尋詣昔相者) <上 10b>
60. 위 사람을 시겨 마마니 가 닐믈 님히 글즈를 뻬더니 명일에 자재 가 아라내여 도적을 잡으니라(洧が人に命じて密かに行って野菜の葉の字を書かせておき、翌日に町に出かけて見つけ出し泥棒を捕らえた/洧令人密往書葉葉為字明日市中認之獲賊) <下 60a>

これらは①後続する出来事との間にある程度の時間が経過する例である。‘-앗더니’の直後に、‘-앗더니’によって表されている出来事が生じたときから別の出来事が生じたときまで多少の時間が経過していることを示す語句が見られる。すなわち、(58) ‘히 남극하야’, (59) ‘그 후의’, (60) ‘명일에’などがそれである。このような ‘-앗더니’は、物語が展開する時間線上においては前景となる出来事を表しつつ、その出来事の後に別の出来事が生じるまで多少の時間が経過する場合に使用されると言える。そのため、ある出来事が後続する出来事のための前提となる場合に、まるでその出来事の影響が保たれているかのような印象を与える。また、(60)のように、予め何らかの意図をもって行動しておき、その後にそれを利用して何か別の行動を起こす、といった「準備」を表す場合にも用いられる。

次に、物語の展開において前景となる出来事というよりは、それに続く内容のための背景を提示する際に用いられている場合である。

61. 복담(中略) 평원태쉬 되엿더니 경시새에 던해 요란하니 담이 쳐즈드려 닐너 곶오디 이제 빅성이 다 주리니 엿디 홀노 빅브르게 히리오(伏湛が(中略)平原太守であつたが更始の時に天下が乱れたため湛が妻子に言つて曰く、今は民が皆飢えているのにどうして独り飽食することができようか/伏湛(中略)為平原太守更始時天下驚擾湛謂妻子曰今民皆饑奈何獨飽) <中 3a>
62. 다시 여러본죽 다 흙덩이 되엿는디라 독에 금을 싸히서 널제 향사 사름이 다 와 보왔더니 문득 변히미 이시니 놀나디 아니리 업서(再び(金の入っていた甕を)開けてみたところ、すべて土塊になっていたのである。甕の金を地中から出した際に郷社の人々が皆来て見ていたので(土に)変わってしまったため驚かない者はおらず/重開視之則皆為土塊矣甕金出土之際郷社悉來觀觀驗遽為變更靡不驚駭) <下 41a>

上の(61)において‘되엿더니’は主人公の在職を示している。先に取り上げた例にあったような時間の経過を示す表現はなく、むしろ後続の部分で述べられている出来事の背景となる情報を提示していると言える。また、(62)は終止形で述べた(31)、(32)と同様の逆行の例である。すなわち、叙述されている順番は「保管してあつた甕を開けて金塊が土になっているのを見る→金塊が甕に入っていることを人々が確認する」であるが、実際の出来事は「金塊が甕に入っていることを人々が確認する→しばらく保管したあと甕を開けて土塊を見る」の順に生じたと考えられる。いずれにせよ、人々が金塊を目撃したことは、その後の土塊を見て驚くという出来事の背景であると言える。

このように、‘-앗더니’が①物語が展開する時間線上において前景となる出来事を表す場合と、②後続の出来事の背景となる状態を表す場合のどちらも、共通しているのは「その後にある程度の時間が経過する」という点である。‘-앗더니’が前景となる出来事を表し、その後ある程度の時間が経過してから次の出来事が生じれば①の用法となる。物語の展開において前景

となる出来事を提示するという点では‘-Ø-’の用法と類似するが、その後に時間の経過があるという点で両者は異なっている。また、ある程度の時間が経過していく途中で別の出来事が生じる場合は、②の背景としての用法が生じるものと考えられ、やはり時間の経過という共通点を見出すことができる。すなわち、(61)のような在職を表す例において、その人物が官職に就いてすぐに次の出来事が生じるのではなく、就任後に時間が経過する途中で生じるのであり、それ故に背景として考えられるようになるのである。このような用法は背景を表すという点では‘-더니’と類似しているが、‘-더니’の場合は(49)の‘가더니’のように、他の出来事と時間の点で重なる出来事を表し、それが背景となるという点で異なっている。また、逆行は‘-았더니’にのみ見られるという点でも‘-더니’との違いがある。

さて、‘-더니’を扱った際に述べたように、引用の‘-히더니’はその後にある程度の時間の経過が示されることが多い。この点は‘-았더니’（つまり‘-히았더니’など）においても同様である。すなわち、引用を表す動詞‘-히-’の場合、時間の経過を表す表現を伴い、引用されている発言の後にある程度の時間が経過するという点で、‘-더니’と‘-았더니’は共通している。したがって、引用を表す動詞‘-히-’の場合、‘-더니’形と‘-았더니’形は違いがないようにも思える。しかし、被引用文に注目すると、‘-히더니’は全体で20個の例がある中、平叙文が16個あるのに対し、‘-히았더니’は16個の中13個が命令文である。つまり、‘-히더니’は平叙文を引用するケースが多く、‘-히았더니’は命令文を引用するケースが多いと言える。なぜこのような傾向が生じるのか、今後、より詳しく考察する必要があるだろう。

次に、会話文の‘-았더니’を見てみよう。用例が少ないため確実ではないものの、会話文の‘-았더니’も基本的には地の文と同様に説明することができる。

63. 금 팔십오 편을 어더 히 자로에 녀히더니 (中略) 삼십니를 가다가 비로소 금이 업슨 줄을

씩드랏노라 (金八十五片を得て一つの袋に入れておいたのだが (中略) 三十里を行ってから始めて金がなくなっているのに気付いた / 得金子八十五片以一袋盛之 (中略) 行三十里始覺其金不見) <下 28b>

64. 접은 본디 차직낭 관슈의의 체라 슈의 전년의 호남의 벼슬히았더니 부스재 스정을 써 패관히기로 써 논히히니 (私は元々は借職郎郭守義の妻である。守義が前年に湖南で官職に就いていたのだが、部使者が私情を挟んで汚職の疑いで (夫を) 弾劾したので / 妾本借職郎郭守義妻也守義前歲官湖南部使者挾私劾以敗官) <中 20a>
65. 그디의 녹과 목숨을 산두니 다 진히았더니 이제 무양히야시니 갑지 그르미 아니면 응당 음덕이 이서 갑히미라 (あなたの禄と寿命を計算したところ全て尽きていたのに今ではつつがなくなっているので、十千十二支が間違っているのであれば必ず陰徳があつて報われたのだらう / 筭子禄壽俱盡今乃無恙非甲子差謬即當有陰徳為報耳) <上 18a>
66. 노귀 굴오디 노뷔 일즉 나의 식어미를 이곳의서 섬겨_(ㄹ)더니 죽손이 불쵸히야 이제 타인의 돈 배 된고로 슬히히노라 (老嫗が曰く、老婦は嘗て姑にここでお仕えしていたのですが子孫が不肖であり今は (その家が) 他人のものになってしまったので悲しんでいる / 嫗曰老嫗嘗逮事吾姑於此子孫不肖今為他人所有故悲耳) <中 13b>

まず、(63)と(64)は‘-았더니’に続く節においても過去の出来事について述べており、会話文ではあるがまるで物語のような性質であると言える。これらの例においては地の文の場合と同じように「時間の経過」という点から説明できる。すなわち、(63)では‘-았더니’によって述べられている出来事後、しばらくして次の出来事(紛失)が生じていると考えられる。これは地の文の説明で①とした用法である。(64)は地の文の説明で②とした用法であるが、在職を示し、後続の出来事が生じる背景を示している。

次に、(65) と (66) であるが、後続する節は過去の出来事を語る内容ではない。どれも後ろに ‘이제’ という副詞を伴っていることから分かるように、これらの例では ‘-았더니’ によって表されている出来事が生じたときから発話時まで時間が経過していると言える。すなわち、(65) では寿命の計算をしたときから発話時まで、(66) では姑と生活していたときから発話時まで、それぞれ時間が経過している。また、これらの例では会話文の ‘-더니’ を扱った際に述べたような「逆接」の関係が、‘-았더니’ の前後で見られることも指摘できる。

ところで、上で終止形の ‘-았더-’ を扱った際、現代朝鮮語の ‘-았었-’ との類似点が見られることに言及した。接続形の場合も、一部はやはり ‘-았었-’ と

の類似点を見出すことができそうである。例えば、地の文において、物語の冒頭で主人公の在職を示し、その後の内容の背景を提示する用法は ‘-았었-’ の「前提」の用法に通じるものであろう。また、先行タクシスを表す用法 (62) や、過去の事象や思考に反することを暗示する用法 (66) なども見られる。しかし終止形の場合と同様、より詳しい調査・考察が必要であろう。

6. まとめ

動詞の過去と関わる各形式の使い分けについて、『種徳新編諺解』における様相を示すと以下の通りである。

表1 終止形の場合

	会話文	地の文
‘-Ø-’	疑問文（特に反問）、否定文	物語の前景
‘-더니-’	少数（話者の目撃と報告）	物語の背景および前景（主人公に近い視点や場面の中に近づいた叙述）
‘-았-’	一般的	（なし）

終止形の会話文の場合、最も一般的な形式と思われるのは ‘-았-’ である。‘-Ø-’ は反問を表す疑問文を中心に用いられており、‘-더니-’ は話者の目撃や報告を表す文脈で使用が見られる。一方、地の文の場合は、‘-았-’ はほとんど見られず、‘-Ø-’ と ‘-더니-’ が前景・背景を担って使用されている。また ‘-더니-’ は背景だけでなく前景を表すこともあるが、その場合、主人公に近い視点や場面の中に近づいた叙述を表すはたらきがあると考えられる。なお、用例が少なくはっきりした結論を見出せなかった ‘-았더니-’ は表に含めなかつ

たが、いくつかの用法が現代語の ‘-았었-’ と類似していることを述べた。

接続形の会話文において主に用いられているのは ‘-으니’ と ‘-아시니’ である。両者の使い分けに関し、本稿では使用される語彙に傾向が見られることを説明した。すなわち、‘-으니’ は非限界的な動詞と多く用いられ、‘-아시니’ は限界的な動詞と多く用いられる、というものである。‘-더니’ の用例は少ないものの、逆接を表す文脈で用いられるようである。地の文の場合、‘-아시니’ はほとんど見いだされず、主

表2 接続形の場合

	会話文	地の文
‘-으니’	非限界的な動詞	主に物語の前景
‘-더니’	逆接の文脈	主に物語の背景（習慣や同時的な出来事）
‘-아시니’	限界的な動詞	（少数）
‘-았더니’	「その出来事と次の出来事の間に時間が経つこと（時間の経過）」を表す。	

に ‘-으니’ が物語の前景を, ‘-더니’ が背景を示す. また, ‘-았더니’ は会話文と地の文において, その出来事と次の出来事の間に時間が経過する場合に用いられる. ‘-았더니’ の後ろに時間経過の副詞などが現れ, 物語が展開する上で前景的な性質を示す用法と, 主人公の在職や叙述の順序に逆行する出来事などを表し,

背景的な性質を表す用法が見られた. さらに, 引用を示す動詞 ‘-’ の場合は, ‘-더니’ と ‘-았더니’ のどちらもその後ろに時間の経過を表す副詞などが続くという点で共通しているが, ‘-더니’ が使用された場合には平叙文の引用が多く, ‘-았더니’ が使用された場合には命令文の引用が多いという傾向がある.

参考文献

- 小倉進平 著, 河野六郎 補注 (1964) 『増訂補注 朝鮮語学史』 刀江書院
 黒島規史 (2014) 「現代朝鮮語の〈hayssessta〉形について」 東京外国語大学修士論文
 黒島規史 (2015) 「現代朝鮮語의 ㄷㄹ다形について－会話文の考察を中心に－」 『朝鮮語研究』 6
 河野六郎 (1946) 「中期朝鮮語の完了時稱に就いて」 『Tôyôgo Kenkyû』 創刊号
 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 1 朝鮮語学論文集』 平凡社
 鈴木泰 (1992: 1999) 『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト』 ひつじ書房
 高橋春人 (2015) 「15世紀朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」 『朝鮮語研究』 6
 浜之上幸 (1991) 「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」 『朝鮮学報』 138
 浜之上幸 (1992) 「アスペクトとテキストの時間的構成について」 『朝鮮学報』 144
 山岡實 (2001) 『「語り」の記号論 日英比較物語文分析』 松柏社

- 고영근 (2007) 『보정관 한국어의 시제 서법 동작상』 太學社
 고영근 (2008) 「민족문학작품과 서사시제」 『冠嶽語文研究』 33
 고영근 (2011) 『제4판 중세국어의 시상과 서법』 집문당
 국립국어연구원 (1997) 『국어의 시대별 변천 연구 2 - 근대 국어 -』 국립국어연구원
 박종은 (1985) 「18세기 전반기의 안맺음씨끝 연구」 『한국언어문화』 3
 박진호 (2011) 「시제, 상, 양태」 『國語學』 60
 이광호 (2004) 『근대국어문법론』 太學社
 李基文 (1961; 1998) 『新訂版 國語史概説』 太學社
 이지영 (1999) 「선어말어미 ‘-더니’ 의 통시적 연구」 서울대학교 碩士學位論文
 伊藤英人 (1994) 「中世韓國語의 ㅎㄷ다와 ㅎ다에 대하여」 『朝鮮学報』 151
 이토히데토 (2009) 「중세 한국어의 시제와 상에 대하여」 『형태론』 11.2
 崔東柱 (1995) 「國語時相體系의 通時的變化에 관한研究」 서울대학교 博士學位論文
 최동주 (1996) 「선어말어미 {-더니} 의 통시적 변화」 『언어학』 19
 최동주 (2002 a) 「前期近代國語의 時相體系에 관한研究」 『語文學』 76
 최동주 (2002 b) 「後期近代國語의 時相體系에 관한研究」 『言語』 27.3
 한동완 (1986) 「過去時制 ‘았’ 의 通時論的考察」 『國語學』 15
 許雄 (1979) 「17世紀國語의 때매김법 研究」 『한글』 164
 許雄 (1981) 「18世紀國語의 때매김법 研究」 『애산學報』 1
 許雄 (1982) 「19世紀國語의 때매김법 研究」 『한글』 177
 洪允杓 (1993) 『國語史文獻資料研究』 太學社
 홍윤표 (1994) 『근대국어연구 (I)』 太學社

Weinrich, Herald (1977) *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. 3. Aufl. W. Kohlhammer, 脇阪豊 (他) 訳 (1982) 『時制論 文学テキストの分析』 紀伊國屋書店

『種徳新編』, 『種徳新編諺解』 ソウル大学校所蔵本（請求記号 不明）, 弘文閣影印（1984）

韓国国立中央図書館 <http://www.nl.go.kr>

ソウル大学校 奎章閣韓国学研究院 <http://kyujanggak.snu.ac.kr>

王室図書館 蔵書閣 デジタルアーカイブ <http://yoksa.aks.ac.kr/main.jsp>

注

- 1 朝鮮語の時代区分は河野（1946: 17）に従うが、本稿で特に扱うのは18世紀後半の時期である。
- 2 例文、和訳、元の漢文、出典を示す。和訳は筆者による。以下同様。
- 3 ただし、中期語において‘-디-’が前景を全く表さないという訳ではない。そのような場合について高橋（2015）では、動詞（句）が表す動作が複数性を含意する場合には‘-디-’を用いて前景を表わすことが可能になる、という説を提案した。
- 4 異なり語数を示すと、限界的な動詞が24語、非限界的な動詞が8語である。
- 5 異なり語数を示すと、限界的な動詞が6語、非限界的な動詞が19語である。